

随想

本 五 村 雜 記 (その三)

— 産 業 に つ な がる も の —

会 員 羽 祭 弘
(本正村史編さん室)

これまでの項目と、前回の分番号訂正(○印)

- (一) 宇津々の古い塔
- (二) 義民堂右衛門の墓
- (三) 灰石とその台地
- (四) 石灰岩峰と洞穴
- (五) 珪岩角地帯
- (六) 飯橋山塊

村の岩石おれこれ(一七号)

(七) 林道とマンガン坑

井、上からバスでのぼると、川向うに前高神社の社叢と、その背後に屏風を立てたような石灰岩壁が目につく。そして上方はるか高いところを、斜にのぼっている林道に気がつく人はあまり多くない。

去る四月五日、十時過ぎから私は自轉車で、自汗から汗と経て、この林道をたどった。舗装されていない林道で傾斜もかなり急、そこで前高神社の上で当る杉林に自転車を置いて、テークテーク歩くことにした。林道の上下は数年前かと思われ杉の伏り跡、植込んだ杉が杉の背丈ほどに伸び、その風は動いている。実は、この林道が藤川内かマンガン山跡にのびているのである。

林道の終点、小さな谷間が幸いその廢坑跡で、坑口がボツカリ枯草の中には見つけた。あちこち別に四か所は

どが見つかり、中には坑口まで水のたまっていてるものもある。エアコンプレッサーの巨体が、半ば赤くきびでころがったまま、大量のズリ(腐石)が谷向こうから杉林にかけて棄てられ、まことにわびしい廢坑風景である。

伝え聞くと、こゝは大正から昭和の頃にはけりて、マンガン鉱石の採掘が盛んであったという、それはここだけでなかったよう、マンガンの鉱脈は上浦り明治から中野・因尾の村々伸んでいて、私も少年ころ川登剛の坑口から峠越して、鉱石の採りあげをしたことがある。重い鉱石で、いまだに肩から背中を締めつけられた苦痛が忘れられない。

冠岳からこの藤川内、それから山部へと延びマンガンの鉱脈はつづいているが、今は全く採掘されていない。しかし、やがてまた探鉱し優良鉱脈の発見し開採・徴勸という日が来るにちがいない。

このあたりからながめる本五村の群がり並ぶ山々のながめはどうだ。

東の方には名峰米峯山(六〇六)が一きわ高くその大きなく豊か山容を示し、右手南方小川境の山並みを従えている。そして分派する山々谷々あちこち、杉の造林地は青黒く、クヌギ林は白茶け、石灰岩峰や急傾斜のところは雑木林、それには山桜が咲いている。北に向いた山並みであるので大半は杉林である。

しかし、それは先週歩いた日田の津江地方とは大いに異なり、村外に大造林家が火資本に物資をせめての林業でなく、主として村の人々が自家努力によって苗木から育て、父祖伝来の山野と聞き、適地に適木を植込み、営々と管理している、これではよい。

あちこちに、県道から上る林道が見え、谷間の杉林に

かく北、それが思わぬ高い所に姿を見せている。この林道は、木材の搬出、針葉造林の植込み、下成り枝打ち、間伐除伐はなくて日当たらない。雑草の原木クヌギも同様である。

尚薪炭林も方々にある。何かの事情で「薪が要る」、木炭生産だ」ということになつたら、明日からでも生産が可能である。

そのようなことを思いつけながら、私は林道を歩いて下った。すばらしい山々のながめであつた。

宇曾川内ヶ谷

これは因尾・堂野間から右手にはいる山里である。直川から板屋に越し、堂野間からこの谷に入ってさかのぼり、峠を越えて野津所に出て、藪が所村とつないで遠く日田に達するという、大型林道の一部である。

しかし、この谷あい日替から人馬の往来は盛んで、因尾と野津市をつなぎ、大野郡各地から大分方面にかけて、経済取引や文化交流のルートであつたといわれる。

時間の関係上、私達(柳井氏東進)は堂野間から宇曾川内に入り、林道を一気に峠に達する。僅かに十分、勿論車であつたからである。柳井氏の孫さん運転の車はここで返し、あと二人で、ながめながら、話しながら帰るという寸法であつた。

峠にかけてのあたりはすべて村の共有林、公社造林だ。そうで十年生あちこちの朽や松が、とにかく成長をへつづけている。とにかくというのは、谷間にはあちこちにカズラに覆かれたのが多いからである。林地あちこちから、しきりにウグイスが啼く。

宇曾川内は人家の近くは別として、あと大半は造林公社と契約の分収林であるという。谷あいには次々に砂防

ダムが築かれていゝ。釜山と釜水と一帯の姿である。

林道は舗装されていゝが、下り道でもあるし、路面も荒れていゝない。両岸の小谷から次々と流れを加え、所所には旋渦がへつづき、私有林と思われる杉林の中は、広いボク場になつていて、このごろの雨で大量の椎茸が採生したらしく、きれいにとられていゝ。

宇曾川内の宇曾はなんであらう。まさか「嘘」ではあるまい。所か入にきいて「さあ」といってわからぬ。私は鳥のウソ(鷲)が多い川内(谷)だろうと見ていゝ。しかし針葉造林が今のように入んで、針葉樹林がこう多くなつては、ウソの繁殖地としては望めないと思う。

人家に近づくと、あちこちにボク場を整え、下し木をたててお作業場や、軽トラック・單車が何台も目にとまる。孟宗林も多く、筋がたがいていゝ。谷川は多少の屈曲があるが、ほとんど一直線に北から南に向つてゆるやかに流れていゝ。水田も少しはある。

しかし、宇曾河内の人々は山林業もそれと椎茸生産を中心にして、それに松を主とした造林と、五月には製茶に励んでいゝようである。だから運搬用の軽トラックと、千エンソールを主に、家近くの小屋には乾燥施設や、製茶場をもちつゝいる。

昔は七軒あつたという宇曾川内、今は一軒だけ減つて六軒だという。人口は減少は多少あるが、いゝゆる山村と異なるといゝでないよう、どの家も立派である。薪炭でなくともサッシ戸が用いられて、納屋やベンと乗用車が置いてある。

そして庭先、軒下、道路わきの田圃には、今朝とへて来た大きな椎茸が、エビラ三十数枚をずらりと連ねて、この山里の豊かさを示していゝ。

(この頃おわり)